『選択集』広本の研究
――その位置づけと本文の改訂過程をめぐって――

井上慶淳

本研究は、法然の主著『選択集』諸本における「広本」の位置づけを明らかにし、そこから見えてくる『選択集』改訂過程の一端を窺う内容となっている。そしてその改訂が後の法然門流にどのような影響を与えたのかという点についても論を進めた。

『選択集』諸本の関係をめぐっては、古来より「略本」「広本」の二系統に区分する見解が示されてきた。しかし今日、両系統の関係については必ずしも明らかでなく、特に広本の位置付けをめぐっては、定説が見られない状況にあった。

これらの問題をうける本研究は、全Ⅱ部から構成される。第Ⅰ部は、『選択集』諸本における広本の位置付けを定める内容で、それをうける第Ⅱ部では、『選択集』の改訂過程について論じている。

はじめの第Ⅰ部について、まず第一章では、現存唯一の広本とされてきた龍谷大学蔵『選択集』存覚相伝本の史料性についての検討をおこなった。その結果、存覚相伝本を広本の基礎史料として用いることが妥当であることを確認した。

次に第二章では、存覚相伝本の記述を略本系統の諸本と比較することで、いずれの系統が先に成立したものなのか考察した。その結果、広本の方が整った記述であることなどを根拠に、「略本から広本」という成立順序を想定できることを指摘した。

そして第三章では、広本独自の特徴的な内容を持つ「二行章」後半の私釈について、成立の背景を窺った。結果として、広本のそれは「興福寺奏状」の内容とよく対応していることが明らかとなった。つまり「興福寺奏状」からの批判に対して応答する意図によって、二行章の私釈が書き改められたという事態を想定できる。故にその成立を、「興福寺奏状」が公になる上限とされる元久三年（一二〇六）二月以降に比定した。

そして次に第Ⅱ部では、広本の内容に至るまでの改訂過程について検討を加えた。まず第四章では、標宗の文「念仏為先」と「念仏為本」の関係について、「法然直弟における『選択集』付属時期の違い」という点に着目して検討を加えた。その結果、ある時期を境に、「為先」から「為本」へと改訂されたと考え得ることを指摘した。そしてその時期を往生院本が成立する元久元年（一二〇四）十

一月二十八日から、遅くとも親鸞へ『選択集』が付属される元久二年（一二〇五）四月十四日までの間に比定した。

次に第五章では、「三輩章」における「次異類助成者」の有無に関して検討を加えた。この六字は、その有無によって助正義の内容に相違が生じるものであるが、その位置付けについては、宗派によって異なる状況があった。この問題をうけ本章では、①「文献的視点」、②「三輩章の内容および法然の思想」という二側面から検討を加えた。そして結論として、この六字は、はじめ脱落して成立した内容が、後年に修正する形で書き加えられたものであると判じた。以上、第五章までの論により、『選択集』には、繰り返し改訂がなされていたことを指摘した。

そして最後の第六章では、それらの改訂が後の法然門流にどう受容されたのかについて、鎮西派第三祖の良忠における広本の依用態度に着目した。良忠は広本を、「門弟が名目などを増広したもの」（門弟増広説）と紹介する。しかし一方で、広本の教説を積極的に引用するという、一見矛盾するような態度が確認されていた。その背景について、本章では、良忠の好敵手であった法然直弟の長西との関係、そして両師の二行二修に関する議論の内容を切り口として検討している。その結果、良忠には広本の内容を無視することができない状況があったことを指摘し、『選択集』の改訂が法然門流に影響を与えていたと論じた。

以上、全Ⅱ部六章にわたる検討を通して、本研究では、『選択集』がその成立後にも繰り返し改訂されていたこと（【図一】参照）、そしてその改訂が後の法然門流に与えた影響の一端を明らかにした。

そのうえで注目したいのは、それらの改訂過程が、広本の存在を抜きにしても成立するという点である。実際、【図一】の一番左側、「存覚相伝本（広本）の祖本の成立」の一列を無いものとしても、この改訂過程を論じることができる。つまり、その存在を抜きにしても首肯される過程が、存覚相伝本には全て反映されているのである。このことは、広本の内容を法然自身の改訂のうえに位置付けられる可能性を高めるといえるだろう。というのも、法然ではなくいずれかの門弟が、自身の付属された内容に独自に手を加えたとすれば、これらの改訂が全て反映されるとは考えがたいからである。

そのうえで、広本の門弟増広説への疑義、ならびに今後の課題を述べて、本研究を閉じた。それらの具体的な内容は、龍谷大学図書館の機関リポジトリに掲載の博士論文要旨に示しているので、そちらを参照されたい。

【図一】

年	月	諸本名や出来事	次異類助成者	標宗の文	二行章後半
建久九年（一一九八）		廬山寺本の成立（**証空**も執筆を担当）	無し×	念仏為先	改訂前
建久九年（一一九八）		兼実高覧本の成立（延応版の祖本か）	（無し×）	（念仏為先）	（改訂前）
建久九年（一一九八）頃		禿庵文庫本の祖本の成立	無し×	念仏為先	改訂前
建久十年（一一九九）		**弁長**への『選択集』付属	無し×	念仏為先	改訂前
元久元年（一二〇四）	十一月	往生院本の成立	有り〇	念仏為先	改訂前
元久二年（一二〇五）	四月	**親鸞**への『選択集』付属	（有り〇）	念仏為本	改訂前
元久三年（一二〇六）	二月以降	**長西**への『選択集』付属		念仏為本	改訂後
元久三年（一二〇六）	二月以降	存覚相伝本（広本）の祖本の成立	有り〇	念仏為本	改訂後